

研 究 紀 要

外 国 語 部 会

[講 演]「高校における英語スピーキングテストの理論と実践～授業内実施，授業内採点に向けて～」

清泉女子大学 言語教育研究所 教授 小泉 利恵 …… 1

[公開授業]

発表者 青森県立青森西高等学校 教諭 米持 亮 …… 3

[第1分科会]「生徒の発信力を高めるための本校での取り組み」

青森県立八戸西高等学校 教諭 栗 橋 奈々子

教諭 馬 場 豊 樹 …… 8

[第2分科会]「ICT 機器を利用した授業例」

五所川原工業高等学校・五所川原工科高等学校 工 藤 恵 子

佐 藤 力 弥 …… 10

[第3分科会]「Expression and Phrases

伝えることに焦点を当てたアウトプット中心な授業での取り組み」

弘前学院聖愛高等学校 教諭 田澤 周平

弘前学院聖愛高等学校 ALT Kang Taeho …… 12

部 会 の 動 き …… 15

研 究 テ ー マ …… 16

紀要編集委員 中 原 亜 美 （青森県立青森南高等学校）

外国語部会

全体講演

【高校における英語スピーキングテストの理論と実践】

～授業内実施、授業内採点に向けて～

清泉女子大学 言語教育研究所 教授 小泉 利恵
記録者 青森県立青森北高等学校 教諭 盛 秀嗣

はじめに

今年度より新学習指導要領による観点別評価を行うことになった。それをまとめて評定に出していくことになっている。そこで、パフォーマンステスト（スピーキングテスト、ライティングテストも含める）をこれまで実施していなかったのであれば、少しずつ改善していくという考えで行えばいいのではないかな。

- ・これまでやってこなかったなら「発表」でスピーキングテストを行うといい。
- ・既に「発表」でテストの経験があれば、「やりとり」のテストを行ってみる。
- ・テストの回数を増やしてみる。
- ・同僚と協議する時間を持ち、評価基準を合わせてみる。
- ・年度初め、年間指導計画の中にパフォーマンステストを入れる計画を入れてみる。

授業内でICT機器を活用することで、今まで費やした時間が浮く部分があると思う。その浮いた時間をパフォーマンステストに向けていただきたい。

1 話すことの評価

外国語教育の抜本的強化のために学習する語彙数を増やし、パフォーマンス評価をし、ディスカッションやディベートなど様々な表現活動をとおして英検2級レベル（CEFR B1）レベルに到達しうる生徒が増えていくような形を目指す。話すことの評価の内容は以下のとおりである。

- ・「発表」と「やりとり」
- ・「準備」と「即興」
- ・「身近な内容」と「社会的な内容」を話す
- ・「話す」と技能統合型（読んで話す、（長い話を）聞いて話す、読んで聞いて話す）

ポイント

学習の評価（成績を付けるための評価） < 学習のための評価（学力を高めるための評価）を目指す

（1）学習のための評価（assessment for learning）とは？

- ・今の学習状況を把握し、学習や指導を改善する目的で行う評価
- ・記録に残すもの（小テスト 定期テスト）
- ・記録に残さないもの（授業中の活動の観察）

（2）教員が行う評価

（3）生徒が行う評価（学習としての評価） … 自己評価、相互評価

（4）形成的評価

- ・学習のための評価が主

（5）総括的評価

- ・学習後に、学習状況を確認し、成績に加える目的（定期テストの結果）

→次学期に活かすための評価もある。

(6) 学習評価の方向性…P D C Aサイクルを回す。

(7) スピーキングテストの実施形態 … 大きく4点挙げられる。

- ① 授業内実施, 授業内採点 (授業中全体で, グループ毎, または個人で実施)
- ② 授業内実施, 授業外採点 (授業中に録音, 後で採点。個人で話す, ペアで話す)
- ③ 授業外実施・その場で採点
- ④ 授業外実施・授業外採点

学校環境に適したパターンを選ぶと良い。一番持続可能であり, 継続可能な形態は「授業内実施, 授業内採点」であろう。コロナ禍で対話が難しければ, 「授業内実施, 授業外採点」も良い。スピーキングテストが上手く行われている学校では, 学年のスピーキングテストにおけるリーダーを決めて取り組んでいる。

(8) 観点別学習状況の評価 (観点別評価)

観点

- ・知識・技能 (言語の適切さ)
- ・思考・判断・表現 (内容の適切さ)
- ・主体的に学習に取り組む態度

3段階

- ・A (十分満足できる)
- ・B (おおむね満足できる)
- ・C (努力を要する)

(9) スピーキングテストの現状は… (令和3年度「英語教育実施状況調査」より)

全体の結果 … 中学校97.7% 高等学校54.6%

青森県の結果

- ・「話すこと」「書くこと」両方実施している割合
- … 小学校89.3%, 中学校87.9%, 高等学校29.9%
- (2018年度調査結果, 高等学校は37.7%であり, パフォーマンステストを行う学校が減っている。)

(10) スピーキングテストに主に関わるもの

- ・教員の, タスクに関する不安…授業と同じものを行って良いのか?
- 初めてテストを行うなら, 同じでも良いと思う。慣れてきたら類似のタスクを, そして即興のタスクを入れるといいのではないだろうか。

(11) 話す力を高めるためのテスト7原則

- ①継続的に評価を行う
- ②タスク形式や個々のタスクは, 指導目標と指導内容と一致させる。コミュニケーション能力の多様な要素を測り, 現実でも行うようなタスクを設定する。力をうまく引き出す指示・手順を考える
- ③採点基準は, 測りたい力を明記し事前に示す。教員と生徒が共に理解しやすいものにする
- ④自己評価と相互評価を奨励する
- ⑤結果の返却時には, 可能な範囲で, 具体的で詳細なフィードバックを渡す
- ⑥結果は採点者によって変わらないようにする (信頼性を確保する)
- ⑦テスト運用は十分実行可能性のあるものにする (継続して行える方法。授業内実施・採点)

2 継続的な評価に向けて

(1) 継続的な実施

①年間計画にパフォーマンステストを入れる。

例 グループ型会話

- ・授業内実施・授業内採点 授業1回分
- ・事前にトピックを与える。
- ・1グループ4人に分ける。グループ分けは当日発表。

- ・ warm up は 2 分。 1 セッション 3 ～ 4 分。
 - ・ 2 ～ 3 人の教員が回って同じ時間に採点。全ての発話を録音。
- (2) これからスピーキングテストを導入する場合、以下のように行うことを提案する。
- ・ 英語コミュニケーションでは
 - 1 学期中間, 2 学期中間, 3 学期学年末 1 ヶ月前
 - ・ 論理・表現では
 - 1 学期期末, 2 学期期末, 3 学期学年末
- (3) 教員による採点
- ・ テスト中, 直後に採点
 - ・ 録音・録画して後で採点
 - ・ テスト前か, 開始直後に, 採点調整会議
 - ・ 可能なら 2 名で行う
- (4) 評価方法や採点方法を同僚と話し合う
- ・ 話し合わなければ, 出題を意図したものとずれていくかも?
 - ・ 学習目標の到達を測れるスピーキングテストか?
 - ・ 採点方法が適切か? A B C がきちんと分けられているか?
 - ・ 対策: 採点調整会議で話し合い, 確認する。同じ採点になるか確認。ずれを無くするために話し合う

3 まとめ

- (1) 成績をつけるためではなく, 学習のための評価となるよう計画しよう。
- スピーキングテストを行うことによって, 生徒も先生も苦手な部分に気づくことができる。それを次の指導に活かすことができる。
- (2) それを継続的に進めていくためには, 年間計画, タスク, 採点基準, 採点方法を丁寧に検討しよう。

参考

高等学校外国語科におけるパフォーマンステスト参考資料

https://www.mext.go.jp/content/20220715-mxt_kyoiku01-000021347_1.pdf

スピーキング評価ポータルサイト

<https://sites.google.com/view/speaking-assessment>

公 開 授 業

発表者	青森県立青森西高等学校	教諭	米持 亮
助言者	青森県立三本木高等学校	校長	小森 直樹
司会者	青森県立青森西高等学校	教諭	秋田 弥生
記録者	青森県立青森西高等学校	教諭	吉澤 美津子

1 はじめに

ICT 機器の使用といえば, 個人のパソコンやタブレットを教室に持って行き, パワーポイントなどを使用するというのが従来の形であったと考える。現在, 各校で ICT 環境が整い, 教員と生徒全員が ICT 機器を使用できる状況である。この状況下で, 積極的に ICT 機器を活用していきたいという気持ちがあり, ICT 機器の活用で授業の効率化が図れるのではないかと考えた。しかし, どのように活用できるのかわからないことが多い。今回の公開授業ではどのように Google Workspace を授業の中で活用できるのかをテーマとして設定した。今春より関連する本や You Tube, また他教科の教員などの意見を参考に ICT 機器の活用方法を思案してきた。模索段階の中で, 実際に本校で行った活用事例を紹介し, 情報を共有していきたい。

2 対象クラス

2 5HR 3 9名（男子1 7名，女子2 2名）

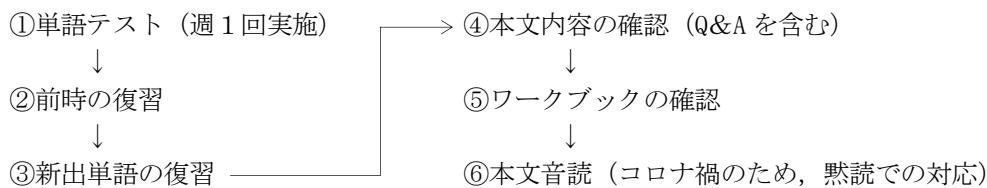
3 生徒観

学年で理型クラスが2つあり，そのうちの1クラスである。熟達にばらつきがあるが，学習に対する意欲が高い生徒が多い。ICT 機器の操作にも慣れている。今回，さまざまな活動を行ったが，どれに対しても積極的に取り組んでいた。

4 教材名

Vivid English Communication II 第一学習社

5 基本的な授業の流れ



6 ICT 機器の活用事例

(1) Google Forms を活用した英単語テスト …………… 授業の流れ①で活用
〈タブレット画面上の解答フォーム〉

第1回英単語テスト

1661183@asn.ed.jp アカウントを切り替える

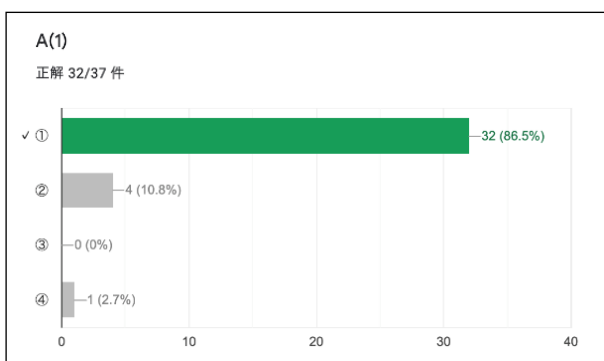
このフォームを送信すると，メールアドレスが記録されます

A(1) 1ポイント

○ ①
○ ②
○ ③
○ ④

紙ベースで問題を見て，①～④の中から一つ選びチェックを入れる

〈問題ごとの正答率を分析〉



〈紙ベースの英単語テスト〉

R 4 第7回（7月4・5日）英単語ターゲット1200【改訂版】（No. 671～700）

年 組 番 名前: / 20点 Pass・Fail

[A] 日本語に合う適切な英語を1つ選びなさい。

(1) クローゼット，収納場所
① ladder ② floor ③ closet ④ entrance (1) _____

(2) 定期航空便；空の旅；飛行
① traffic ② wheel ③ flight ④ route (2) _____

(3) 階段
① roof ② ladder ③ stair ④ ceiling (3) _____

(4) シャワー（室・器具）；にわか雨
① housework ② garbage ③ shower ④ flight (4) _____

(5) 冷蔵庫
① garbage ② refrigerator ③ plate ④ closet (5) _____

[B] 英語に合う適切な日本語を1つ選びなさい。

(6) roof
① 屋根 ② 天井 ③ 床 ④ 歩生

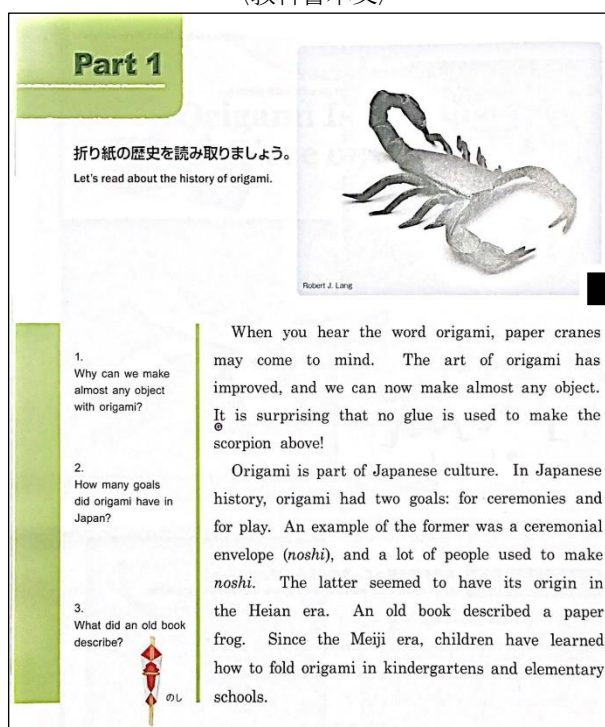
〈誤答の多寡を分析〉

❏ 誤答の多い質問 ❓	
質問	正しい回答
C(13)	12/31
C(15)	13/28
D(20)	0/11

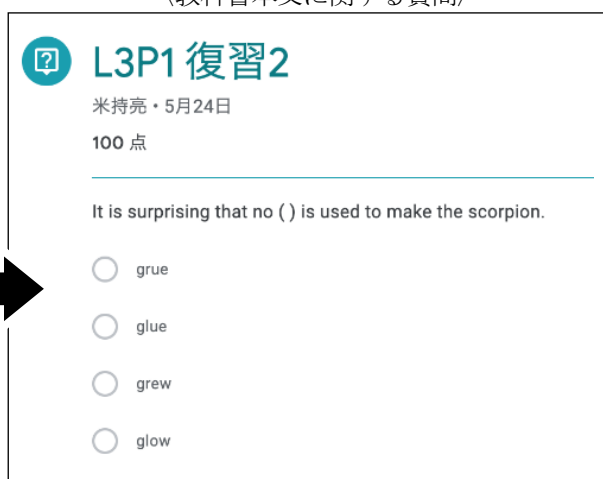
英単語テストを Google Forms で解答してもらうことで，問題ごとの正答率や，どの問題で誤答が多いのかすぐに集計処理し，分析できる。

(2) Google Classroom の質問機能を活用した前時の復習…………… 授業の流れ②で活用

〈教科書本文〉



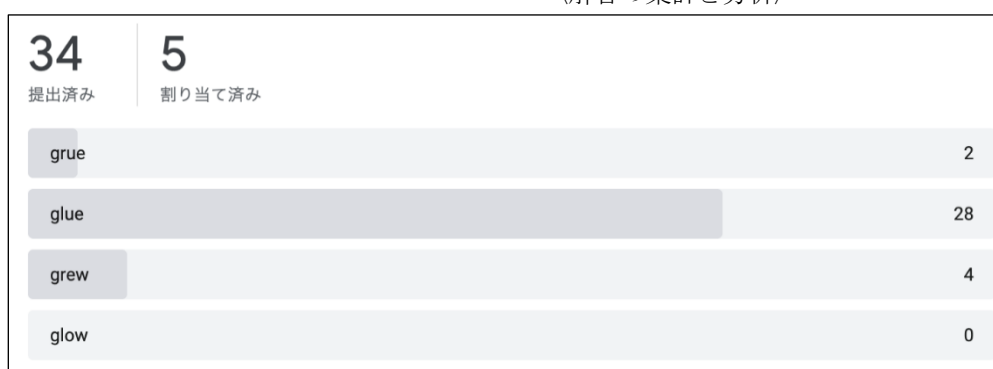
〈教科書本文に関する質問〉



前時の復習を授業の導入部分で実施する。その際、タブレット端末に教科書本文に関する問題を提示し、選択させる。



〈解答の集計と分析〉



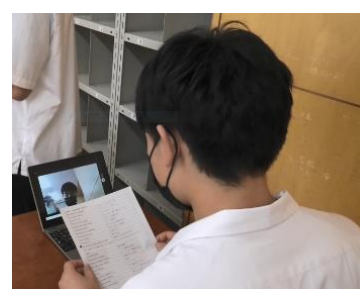
集計処理はすぐに完了。どの問題で、何人、間違えているのかが視覚的に把握できる。

(3) 音読録画の提出…………… Lesson のまとめで活用
本文のフレーズごとの英語と日本語を対訳した音読シートを配布しており、それを用いて音読活動や音読録画を行う。音読は1ページ読むごとに左回りに向きを変え、計4回読む。(コロナ禍なので黙読で)

〈音読練習の様子〉 授業の流れ⑥

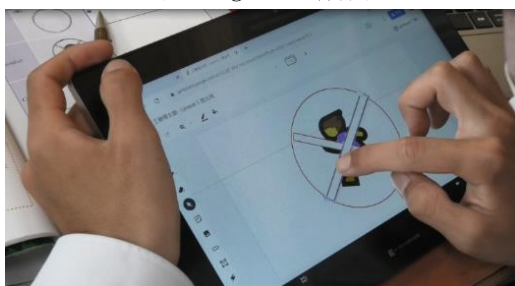


〈音読録画の様子〉 各 Lesson の最終時に実施し、録画を提出

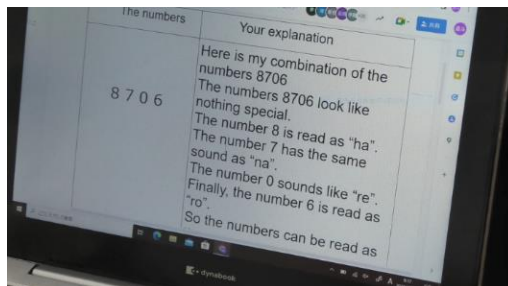


- (4) Jamboard やドキュメントを活用した課題提出 …………… Lesson のまとめで活用
 例) Jamboard (デジタルホワイトボード) を使用 : Pictogram を作成し、提出する。
 例) ドキュメント (文書を作成するアプリ) を使用 : Wordplay を作成し、提出する。

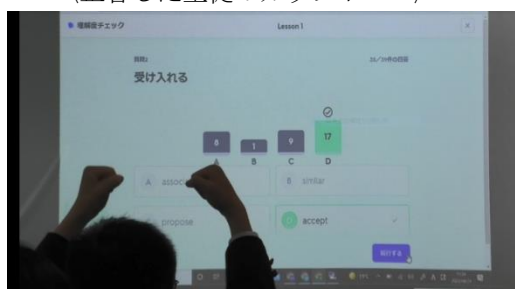
〈Pictogram の作成〉



〈Wordplay の作成〉



- (5) Quizlet を活用した単語復習 …………… Lesson のまとめで活用
 〈正答した生徒のガッツポーズ〉



- Quizlet を活用し、クイズ形式で単語復習を実施する。
 ①教員が、タブレット端末に出題
 ②生徒は、各自のタブレット端末に解答を入力
 ③全員の入力を確認したら、スクリーン上に正解を提示
 ④クラス全体の解答状況がスクリーン上にグラフで表示

7 ICT 機器を活用してみた感想

	メリット	デメリット
(1) 英単語テスト	- 集計に時間がかからない。 - 平均点や誤答などが把握できる。	解答の提出に時間がかかる。(20 分程度)
(2) 前時の復習	- 生徒を指名する必要がある。(毎回、誰に当てようか迷う必要がない) - 板書をせずに復習できる。 - 全員の理解度が確認できる。	- 事前準備として、質問の作成に少し時間がかかる。 - 配信や解答に時間がかかる。(10 分程度)
(3) 音読録画の提出	時間をかけてじっくりと音読の評価ができる。(授業では評価できない、一人一人の評価が可能になる)	- 空き教室を複数用意する必要がある。 - 録画と提出に時間がかかる。(25 分程度) - 他の生徒の音声が入ることもある。
(4) 課題提出	- 時間をかけて課題の評価ができる。 - ペーパーレスである。	特になし。
(5) クイズ形式の単語復習	クイズ番組のように楽しく復習ができる。盛り上がる。	- 時間がかかる。(15 分程度) - 白熱するとやめられない。

8 考察

ICT 機器の活用に関しては、何ができるのか分からない部分もまだまだあると思う。実際に活用した中で、生徒の Wi-Fi 接続に不具合があったり、こちらもうまく課題等を配信できなかったりと失敗を重ねてきた。お互い初めての試みなので ICT 機器を使用した活動のみに時間がかかり、予定通りに授業が進まないこともあった。しかし、失敗ありきで使ってみるという姿勢が大事なのではないかと思う。ICT 機器を使用することにより、小テスト等の簡略化、動画提出、ペーパーレス化や学習アプリの使用など従来の授業にプラスになる面は多いと考える。従来の授業に ICT 機器を使用することにより、授業の幅が広がる可能性は大いにある。あくまでも今回の取り組みは試行錯誤した中での事例紹介である。まだまだ改善の余地はあると思われるので、これからも ICT 機器の活用を模索していきたい。この発表が各先生方の ICT 機器の活用の一助になるものであれば幸いなことである。

【質疑応答】

- 質問 1 Google Workspace について教えてもらいたい。途中で Word のようなものを使い文章を打たせたものを提出させる場面があったが、キーボードを打つのに時間がかかっているように感じた。画面に触れて表示できる iPad にペンで書いたものを提出すれば打つ分の時間が減らせるのではないかな。
- 回答 1 iPad は使っていないが、書いて提出することはできると思う。Jamboard だと手書きでできるが、各生徒が専用のペンを購入する必要がある。確かに生徒が入力するのに時間がかかっていたので、それは今後の課題である。
- 質問 2 現在、ICT 機器の活用は試行錯誤している段階ということで、授業で使う例をいくつか紹介してもらった。今後家庭学習で Google を使って課題を配信することは考えているのか。
- 回答 2 今回紹介した Jamboard でのピクトグラムの作成に関しては、時間がかかって授業中に終わらなかった生徒に提出期日を決めて提出させた。家庭学習としても活用できると思う。指示された課題について、家庭学習として生徒が自分の自由な時間に取り組むことができるようにすれば、授業時間を費やす必要がなくなるのではないかな。
- 質問 3 先ほどのドキュメントのキーボード入力の件については、家庭学習でやるという形にしたときに生徒たちはスマホのフリック入力でやればうまくできたりすることもある。そうすると少しスムーズにできるのではないかなと思った。
- 回答 3 ドキュメントについては音声入力もでき、話したことが文字化できる。今後それによって音読練習で対応できればいいかなと考えている。
- 質問 4 英単語テスト実施により、スペリングや発音が苦手な生徒が多くなるのではないかな。
- 回答 4 単語テストに関しては活用事例（2）の「単語テスト」を配って実施している。大分県の生徒は、従来通り紙媒体に書いてからフォームに入力しており、時間がかかる生徒もいる。紙ベースへの解答と入力を一緒に実施しているのでスペリングに関しては問題はないと考えている。今後、正しいスペリングで単語を書けない生徒が増えるなどの課題が出てくるのであればその時は対応していきたいと思う。

【助言】

Google Classroom を使った授業展開例を発表してもらった。これから本格的に導入しようという学校が多いと思うので、取組の参考例ということで皆さんの参考になるのではないかなと思った。私自身が ICT の専門家でもないのに助言と言うよりは一般的な話など感想めいたものになるかもしれないが、話してみたいと思う。

ここ数年で GIGA スクール構想の進展によって、すべての学校に Wi-Fi が備えられ、生徒全員にタブレット端末が配布された。しかし、そこには我々教員が使い方を学んで生徒に活用させるという大きな課題がある。ICT を上手に活用する方法を皆で考え、勉強していかなければいけないことになると思う。

新学習指導要領では「情報活用能力を学習の基盤となる資質能力と位置づけ、教科横断的にその育成を図るとともにその育成のために必要な ICT 環境を整え、それらを適切に活用した学習活動の充実を図る」という言葉が書かれている。情報教育が非常に大事になってきているのが今回の改訂の大きな変化の一つであると捉えている。環境が整ったので、それらを適切に活用した学習活動の充実を図る部分をなんとかしなければならぬという課題が私たちにある。今日はヒントとなる活動例を紹介してもらったが、Google Workspace をどう使うか、Google Workspace だけに限らず ICT 機器を使って生徒を動かしてどういうことをやっていくか、従来の授業から脱却していく必要が出てきており、そういう意味では授業改善をどんどんやるのが私たちに与えられた大きな宿題なのだろうと思う。端末が整って、それを宝の持ち腐れのようにしておくわけにはいかない。非常に効率的な授業ができるようになるので当然時間がその分生まれる。その時間をどのように生かしていくのか、そういうことが授業改善という言葉に繋がっていくと思う。まだまだ今導入されたばかりなのでこの辺は各学校で各先生方みんな情報共有しながら、上手に生徒の活用を進めて行くことになるのだと思う。

今回一つだけ気づいた事を言うと、活用事例の（3）番「音読録画の提出」というのがあった。それをどう評価するのか、評価基準はどうなっているのか、そのことを生徒にも事前に提示して説明をきちんとしておくことが大事になってくる。その辺の研究もやって行かなければならないと、今日の発表を見て思った。今回の米持先生の発表を参考にしながら各校の実情に合わせて授業改善をしていき、情報交換をしていく必要があると思う。今

日の Google workspace の活用例は参考になったのではないかな。お互いに試行錯誤して前向きな姿勢をもって取り組んでいけたらいいと思って今日は見ていた。

【第 1 分科会】

「生徒の発信力を高めるための本校での取り組み」

発表者	青森県立八戸西高等学校	教諭	栗 橋 奈々子
		教諭	馬 場 豊 樹
助言者	青森県立弘前南高等学校	教頭	吉 川 智恵子
司会者	青森県立八戸西高等学校	教諭	志 田 晶 子
記録者	青森県立三戸高等学校	教諭	大 崎 敬 子

(栗橋先生による発表)

1 はじめに

八戸西高校には各学年 6 学級ある。本日の発表は、現 3 年生についてであり、自分が 3 年間担任として関わってきた生徒たちである。

2 研究のきっかけ

ある ALT との出会いである。スペイン語を教えてもらう機会を持つことができて、非常に楽しいと感じた。このことにより、生徒も英語を使いたいと感じているのではないかな、と気づいた。コミュニケーション英語Ⅱでスピーキングをやってみようと思い立ち、時間を作るにはどうすればよいか考えた。パワーポイントを使って授業をパターン化し、日本語訳を確認するのをやめ、これによってできた時間をスピーキングに充てようとした。しかし、コロナの影響で声を出す活動が憚られる状況になってしまった。ここで諦めず、もう一つの発信する活動であるライティングをやってみることにした。

3 ライティングの実践

パワーポイントのスライドで、新出単語のパラフレーズを紹介した。意欲的な生徒はメモをとるようになった。また英文の日本語訳をやめて、内容把握を英問英答で済ませ、エッセイライティングに取り組む時間を作ることができた。エッセイライティングは、自分がまず書いてみて、制限時間や字数を指示し、書かせた。英語だけでは取り組みにくい生徒のために、イラストの入ったワークシートなども作成した。

当初は、日本語訳をさせないことが不安であったが、生徒から特に不満は出ていない。また、パワーポイントの準備に時間がかかるのではないかなと思っていたが、内容をパターン化することで、それほど大きな問題はなく実践できている。

4 成果と課題

自分の主観では、生徒が単語を学ぼうという意識が向上したと感じている。客観的な検証として、(株)ベネッセコーポレーションの梶田さんに、GTEC や模擬試験の結果をもとに生徒の変化を分析してもらった。生徒の英作文を分析すると「語彙の幅は広がっている」とのことで、ライティング指導の成果は出てきていると思われる。一方で「英語としての違和感がある文を書いてしまう」という課題があることが分かった。さらに、まとまりのある内容を書く場合は、1 文ずつ羅列してしまい「因果関係の弱さ」が見られるとのことであった。

(株)ベネッセコーポレーションの担当者からは「多くの英文に触れる機会を提供する」こと、「誤文を訂正することで、違和感があることに気づかせる」ことが必要だとアドバイスもらった。英作文は 1 回書かせて終わりではなく、改善策を考える時間を与えることが必要だと考える。また、受信技能と発信技能のバランスについての分析によると、リーディングとリスニングの弱さが見られた。4 技能のバランスを取りながら指導する難しさを実感している。

5 終わりに

生徒は語彙習得に意欲的に取り組むようになり、1年生の頃に比べると書く分量も増えてきた。今後も生徒を励ましながら指導していきたい。

(馬場先生による発表)

1 はじめに

新教育課程である1学年を対象に、パフォーマンステストを実施した。授業外での実施である。1年生の指導のスタートとして、話すこと(発表)を、ICT機器を活用して指導し、生徒のモチベーションを上げたいと考えた。方法よりも内容に焦点を置き、来年度以降へ持続可能なものにしようと考えている。生徒が自分で探究活動ができるようにさせることも、目標としている。

2 パフォーマンステストの実施

今回のテストにはタブレット、google classroom、google slideを使用した。中学生にもわかる英語で、という指示をしたのは、生徒が学習済みの単語を使ってみようという気にさせるためである。発表の原稿は作成させず、書くとしてもメモ程度にさせた。練習は授業内で時間をとるのではなく、家で各自やるようにさせた。評価のためのルーブリックも資料として載せたので、参照していただきたい。

生徒①は、発音を自分で調べて練習した様子が見える。また、自主的に何度も練習したようであり、学習のモチベーションを上げることができたと思う。生徒②は、読む・書くことが苦手だが、話すことが好きな生徒である。今後は内容をもっと詳しいものにしたい、ということの評価シートに書いており、聞き手を説得するにはどうすればよいかを考えさせるとよいと思う。生徒③は、日本語でも人とのやりとりが苦手な生徒である。教室ではできないが、家での動画撮影だったため、ここまでできたと思う。文法や発音の間違いが多いので、正確さをどのタイミングで指導していくかが、今後の指導の課題である。

3 評価

評価シートは、生徒にとってわかりやすい表現を使って、事前に提示した。できなかったことでなく、できたことを書かせるようにした点が、工夫したポイントである。また、C評価を出さないために、教員が事前にスライド例を作成し、良い例と悪い例を提示した。教員間での協議は、評価をAにするかBにするか迷った時に行った。教員が生徒観を普段の授業でつかんでからテストを実施した方がよいと感じた。

4 今後に向けて

このテストはgoogle classroomに卒業まで蓄積されていくので、生徒が何をどのくらいできるようになったかがわかるようになる。ICTを使うメリットであると思う。デメリットとしては、その場でフィードバックしてあげられないことだと思う。

今回のテストは話すことの「発表」であったが、「やりとり」は普段の授業の小さい活動として行っている。3年次まで段階を踏んで指導していく計画である。

(質疑応答)

青森西・米持 生徒に動画撮影の指示をする際、google slideではどのような指示をしたのか。
馬場 紹介したい物の写真と、語のキーワードは必ず提示するように指示した。生徒には動画をタブレットで作成させたため、写真の提示はスマートフォンでするように指示した。

八戸聖ウルスラ・植田 生徒の苦手意識を下げ、モチベーションを上げたことによって、授業内での、発話などのアウトプットに対する姿勢に変化は見られたか。

馬場 普段の授業でもアウトプットの活動をスモールステップとして行っていたためか、いざパフォーマンステストの指示をしても、それほど抵抗なく取り組んでいたようである。もともと話すのが好きな生徒が多く、ミスを恐れずに活動に取り組んでいると思う。

(助言)

栗橋先生の素晴らしい点は、生徒とのコミュニケーションがうまくとれているところである。また、ご自身が学習者の立場に立って、授業の課題に気づき、それを改善していこうとする姿勢である。

馬場先生の素晴らしい点は、きちんと目的・場面・状況の設定をしてからスピーキングテストを行っていることである。生徒の興味関心を引き、時代に合ったものであること、また、評価のルーブリックをきちんと準備したことである。

栗橋先生が「教科全体で授業改善に取り組む姿勢を作っていきたい」と発表前におっしゃっていた。高等学校の授業においては「依然として外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に話すこと書くことなどの言語活動が適切に行われていないこと、やり取りや即興性を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を結びつけた言語活動が適切に行われていない、といった課題がある。

お二人の発表から言えることは、教科全体で行うということと、言語活動の工夫をする、この2点が重要であるということである。

先日函館中部高等学校の弦木先生からお話を伺う機会があった。年度初めに英語科教員全員で、生徒に身につけさせたい力を話し合い、目線合わせを行うそうである。CAN-DO リストを作成し、1年生を体育館に集めてオリエンテーションを行い、間違いを恐れずに話したり書いたりしようと意識付けを行うそうである。先生方全員オールイングリッシュで授業を進めていらっしゃる。授業最初のスモールトークに始まり、活動の説明、生徒とのやり取り、教師の指示・反応など、1時間で2000語程度の英語を聞くことになるそうである。プリントの指示やルーブリックも英語で書くことで、リーディングの活動も加わる。指示を英語で聞くことでリスニング、書くことでライティング、発表でスピーキング、4技能全てが入った授業となる。生徒は自分で話すことをメモでまとめたり、相手の話を聞いてメモをとったり、教科書の内容を自分なりにまとめたりしてノートをとっている。板書を写すのではなく、自分のことばでまとめている。興味のある方には資料を共有できるようにするので、連絡をいただきたい。

どうしてもスピーキングは準備したものを発表する形で終わってしまいがちである。即興性を意識した授業は、市立函館高校さんの英語の授業を見せていただいた時に、なるほどこういうやり方もあるのか、と感心したことがある。ペットとして犬を飼うときの良い点と悪い点をクラス全体で共有する。ディベートを行うときは、ペットを飼いたい子どもと、許さない親、そしてジャッジの3人で行う。ディベートを始める時に教師が犬とは全く違う別の新しいペットの写真を黒板に貼って、さあどうぞ、とやっていた。生徒たちは喜んで活動に参加していた。学んだことを利用しながら即興性を意識したやり取りとなる。

今回紹介した2つの学校で共通していたのは、授業の中で4技能を駆使し、楽しみや驚きがある活動をすることによって生徒にとって深い学びになっているという点である。

英語科教員で目線合わせをすること、生徒が楽しみながら4技能を駆使した授業をすること、その二つを意識すれば自然に生徒の発信力は高められる。

【第2分科会】

ICT 機器を利用した授業例

発表者	青森県立五所川原工業高等学校・五所川原工科高等学校	教諭	工 藤 恵 子
	青森県立五所川原工業高等学校・五所川原工科高等学校	教諭	佐 藤 力 弥
助言者	青森県立板柳高等学校	教頭	作 田 宏 之
司会者	青森県立木造高等学校	教諭	藤 田 百合子
記録者	青森県立五所川原高等学校	教諭	島 村 泉

1 本校の特徴

五所川原工科高校は、鶴田高校、板柳高校、金木高校、五所川原工業高校が統合し、普通科と工業科を併置する県内初の県立学校である。五所川原工業高校は来年3月で閉校する。

普通科2年では、コミュニケーション英語Ⅱを全員が4単位、英語表現Ⅱを文類型で3単位、理類型で2単位履修している。

2 本校の ICT 機器について

全校生徒にタブレット端末が配布され、教室にはプロジェクターと電子黒板が備わっている。Wi-Fi でインターネットに接続することもできる。Google Workspace の中で Classroom を使って連絡をする他に、健康チェックや探究学習にも利用している。

3 英語の授業における ICT 活用の例

プロジェクターで本文や設問を投影したり、タブレットから音声を流したりしているが、ここではその他の授業内での活用例を紹介する。

(1) ICT 機器を利用したプレゼンテーション授業（初年度）

タブレット導入初年度、普通科1年のコミュニケーション英語Ⅰで「自分のおススメの場所」を紹介するプレゼンテーションに活用した。

① 授業概要

おススメの場所について、写真や動画をタブレットで見せながら Show and Tell の形でプレゼンテーションをさせた。動画や画像はインターネットで検索、原稿は紙ベースでやりとりした。

② よかった点

動画や画像、また単語や表現も検索を用いることで時間をかけずに素材を収集することができた。
タブレットを利用することで苦手な生徒も「何もできない」ということなく実施できた。
動画や画像を見せることで聴衆側も興味を持って聞くことができた。

③ 課題

機器の操作や発表の手順など、欠席生徒への説明が二度手間になった。
原稿のやりとりを紙ベースで行ったため、未提出者への声がけに時間がかかりなかなか進まなかった上に、原稿の添削を全て行うのは教員にとって負担であった。

(2) ICT 機器を利用したプレゼンテーション授業（二年目）

普通科2年のコミュニケーション英語Ⅱの授業で、タブレットを使って「料理の作り方」を英語でプレゼンテーションする授業を行った。

① 授業概要

Google Classroom を通じて指示を出したり原稿を打って提出させたりした。また、タブレットのカメラ機能を活用して、英語による発表の練習を「自撮り」して友人と見せ合う活動を取り入れた。ループリッックを事前に提示して練習させ、本番でプレゼンテーション活動に臨ませた。「振り返りシート」を配信して、発表後の振り返りも行った。

② よかった点

Classroom を通じての連絡は、欠席者にも伝わりやすかった。また、放課後に未提出者に提出を促すこともできたため、前年度よりスムーズに進めることができた。
タイプした原稿を元にオンラインで添削をしたため、教員の負担が減った。
「自撮り」による練習は、自己の英語を客観的に見つめ直すきっかけとなり、練習のモチベーションが上がった。振り返りでも、練習の大切さを実感したという声が多く見受けられた。
練習を重ねることで、生徒の英語力、特にプレゼンテーションにおけるスピーキング力が非常に向上した。1年生の時は顔も上げられず小さな声しか出せなかった生徒も、堂々としたスピーチをすることができた。

③ 課題

Classroom を利用することで勤務時間外も常時原稿のやり取りをすることができるようになったため、送信されてきたらすぐ返信しなければ…という教員の心理的負担があった。時間を決めてある時刻以降は

翌日に返信する、といった取り決めをした。

Google 翻訳に頼りすぎる生徒がいた。そのせいで、自分で書いたはずの英文中の単語が読めない、といった事象が起きた。

よい発表や練習風景は動画で撮影して共有したいが、インターネット上での動画の共有は本人同意が必要であり、コンプライアンスに対する配慮が必要である。

4 今後に向けて

ICT を授業に活用したが、「ICT がメイン」なのではなく、あくまでも「英語の授業」なのだということを忘れずに、ICT を勉強道具の一つと捉えて活用していくことが大切だと考える。

また、一部の教員だけではなく、全教員の共通理解の下で ICT 活用をしていくべきだと考える。特定の年度だけ、特定のクラスだけではなく、持続可能な授業として定着させていきたい。

授業の方法としては、教室の中での発表という形を取ったが、自撮り動画のベストのものを送信させて評価するという形も可能なのではないかと考える。

ICT を活用したスピーキングの活動により着実に進歩している生徒もいるので、今後も続けていきたい。

5 質疑応答

・動画等の共有に生徒の同意が必要だとのことだが、年度初めに同意書の提出はしているのか。

ー同意書の提出はさせていないので、共有する場合はその都度生徒から同意・許可を得ている。

・Google 翻訳の問題点が指摘されていたが、何か使用制限する対策は取っているか。

ー今のところ使用制限はできていない。

・英語によるプレゼンテーションを、聞いている生徒はどの程度理解しているのか。聞く側の理解を判定する工夫はあるか。

ーグループワークで感想を書かせたが、概ね理解できているようだった。聴衆側の理解の補助としてサマリーを配布するのでもいいかもしれない。

6 助言

新学習指導要領では情報活用能力も言語運用能力と同様に学習の基盤となる資質能力であると捉え、ICT を活用する学習環境の充実を図ることが求められている。端末の操作に習熟した生徒が入学してくる状況にあって、教員側も ICT 活用に習熟し、活用方法を考えなければならない。本発表においては授業で効果的に ICT 活用をして生徒の英語力を向上させており、各校においては2学期以降の授業で是非参考にしてほしい。

Google 翻訳の問題点についてだが、まず Google 翻訳は完璧ではないことを生徒に伝えるべきである。単語の読みについては、Google 翻訳の中に発音チェック機能があり、うまく利用すれば発音の指導にも利用できる。また、文法チェックができる Grammarly、英作文の投稿ができる Write and Improve with Cambridge といったサイトもある。ICT に安易に頼るのではなく、ツールの一つとしてうまく組み合わせて利用することが大切である。まずは楽しみながら ICT に習熟し、学習目標を立て、どの場面で ICT を活用するべきかを考えてほしい。

【第3分科会】

Expression and Phrases

伝えることに焦点を当てたアウトプット中心な授業での取り組み

発表者	弘前学院聖愛高等学校	教諭	田澤周平
	弘前学院聖愛高等学校	ALT	Kang Taeho
助言者	青森県教育庁学校教育課	指導主事	小角大樹
司会者	弘前学院聖愛高等学校	教諭	梅原純一
記録者	青森県立弘前南高等学校	教諭	堀内善仁

1. 実践の紹介

(1) 学校の紹介と受け持つ授業について

543名の生徒が在籍している中学・高校一貫型の私立学校である。創立以来、一貫してキリスト教主義に基づく人格教育を行っている。高校の課程では、1年次の論理・表現Ⅰ（週2時間）のうち1時間、2年次のコミュニケーション英語Ⅱ（週4時間）のうち1時間、3年次の英語表現Ⅱ（週4時間）のうちの1時間を活用してティーム・ティーチング（TT）を行っている。発表者が担当しているのは1年次で、1学年を担当する3名の日本人教員が分担して、5つある全てのクラスでTTを実施している。ALTは全てのクラスを担当しているため、それぞれのクラスの状況を担当者と共有し、想定されるつまづきのポイントや改善点等を授業前に打ち合わせている。

(2) 論理・表現Ⅰの目的とは

ALTが行う授業は英会話が目的であると認識されがちであるが、会話をするにはあまりにも生徒の数が多く、現実的ではない。論理・表現Ⅰの目的は「論理的に表現する」こと、つまりは何かをテーマとして、それを説明できることだととらえ、論理的に表現することを目標に指導している。説明が出来るようなアウトプット活動を設定している。

(3) 乗り越えるべき課題

アウトプット中心の授業をする際に課題となるのが、生徒たちの書く意欲や話す意欲が低いことである。例えば、ALTが生徒に“How are you?”と問いかけても、生徒たちは意味が分かっているにもかかわらず、応答しないことがある。また、毎回のTTの授業で導入している“Journal”というライティング活動でも、生徒たちは簡単な質問にもかかわらず意見を書かない、ということがよくある。生徒たちのアウトプットの意欲が大いに低いという点が、大きな課題として存在している。このような課題を乗り越えるために、本校では3つの方策を取り入れ、克服しようと工夫している。

(4) 課題を乗り越える方法

①アウトプットの量を増やす

アウトプットの質を評価するのではなく、その量を評価することにした。つまり、一つのトピックに対してどの程度説明できる、どれほど情報を出せるかを評価することとしたのである。ただし、“What is your favorite fruit?”という質問に対して、“I like strawberries. I like bananas. I like apples. …”のような同じような構造の文はOne Sentenceとして捉えた。“My favorite fruit is strawberry. It is red. My family loves it too. …”のように、さまざまな情報を出せるかどうかを評価するようにした。授業内のJournal活動において、一つの文を書く毎に1ポイント与え、SVがなくPhraseのみのような場合でも0.5ポイント与え、評価を数値化して把握できるようにすることで、生徒の書く意欲を高めるように工夫した。さらにJournal以外にもスピーキング活動を行い、Journal同様に一つの文が言えれば1ポイント、SVがない不完全な文でも言ったならば0.5ポイントを与えた。一方で何を書いているか分からない、もしくは何を言っているか聞き取れない場合には減点とした。このように評価の基準を事前に示すことによって、英語が苦手な生徒も含めて、徐々に間違いを恐れず自発的にテーマに沿って英文を書いたり話したりするようになった。

②日本語の簡略化

英語を書いたり話したりするうえで障壁となるのが、「頭に浮かんだ日本語表現が英語に直すうえで難しいものである」という問題である。そのため、まずは頭の中にある日本語を簡略化することに取り組んだ。授業の中で日本語を簡略化することを繰り返し練習することに加え、欠けている主語を明確化したり日本語と英語の違いを説明したりすることによって、英語のアウトプットをより行いやすくした。

③コンテキストの中のフレーズ

方法の①と②で英語でのアウトプットに慣れてきても、日本語から英語に直訳できないような表現（例：“How’s everything?” → 「調子はどう？」）もある。このような表現はフレーズ毎に覚えなければならぬが、中々覚えられないという生徒の実情があった。そのため、これらの表現を使用する状況（コンテキスト）を併せて説明してから指導することで、英語特有の表現の定着を図った。前出の例の場合、人と会ったときに登場する表現である、と状況をイメージさせることによって、生徒の理解が深まると同時に、直訳しても意味のない表現があるのだと生徒に伝えることが出来た。加えて、表現を指導する際、単語の発音ではなくMelody of prosody（韻律）を伝え、コンテキストによって同じ言葉でも受け取られ方が変わる場合があることも指導した。

(5) 結論

語学の最終的な目的は「伝えること (Communication)」である。間違いを恐れずに伝える、自分が知っている表現を駆使してやりとりをすることが大切であると考えている。アウトプット中心の授業をすることは、このような語学の目的に到達するための一つの方法である。アウトプットの授業を文法の授業と併せて実施することで、大学受験対策にもなるのではないかと感じており、聖愛高校では今後もアウトプット授業を多く取り入れたいと考えている。

2. 助言

論理・表現Ⅰは3領域を中心とした発信力を強化することを目的とした授業であり、今回の実践はその目的に沿ったものであるといえる。生徒のアウトプットを増やすことを目指し、具体的な取り組みや注意点が述べられており、参考になる点が多かった。実際の授業の様子を、いくつかポイントを絞ったうえで参加者に見せることで、さらに参加者にとって有益なものになるのではないかと感じた。また、生徒のパフォーマンスをどのように評価するかは今回の大会の大きなテーマとなっており、現場で多くの先生方が工夫しながら取り組んでいるところである。発表内で Journal という取り組みが紹介され、発表した文一つにつき1ポイントを与えるというものは、生徒のアウトプットを増やすための工夫として有効であると感じる。ある程度まとまった内容の発話が可能となると、文法やアウトプットの正確さが課題となってくるが、日本語の簡略化やコンテキストの中のフレーズ指導を行うことは、これらの課題を克服するうえで有用だと考えられる。実際に話した内容が相手に対して正しく伝わっているかを確認する場面も設ける必要があるのではないかと感じる。

生徒のアウトプットの評価に関する話の中で、生徒の実際のライティングを資料で示しながら説明していたため、非常に説得力があった。アウトプットの評価を行う際のポイントに関して補足すると、学年内で複数の教員がアウトプットを評価する際に重要となるのが、「いかにして評価の基準をそろえるか」という点である。その際に参考となるのが、小泉利恵教授（清泉女子大学 言語教育研究所）の書籍や文部科学省ホームページ内で閲覧できる「パフォーマンステスト確認資料（教員用）」である。パフォーマンステスト実施の際に難しい「教員の目線合わせ」のための有効なツールであるため、積極的に活用してもらいたい。さらには「英語教育実施状況調査」によると、本県は「話すこと」の活動にはかなり積極的に取り組んでいるといえるが、「話すこと+書くこと」になるとその割合が低下しているという現状があるため、今回の発表を参考に、「書くこと」にも目を向けてもらいたい。

最後に、この発表はTTが大きなポイントの一つであるが、日本人教師とネイティブ教師の授業内での役割分担を、今後の東北大会での発表に向けて付け加えてもらいたい。

部 会 の 動 き

令和4年

- 5月18日(水) 第1回役員会 (於 青森県総合社会教育センター 第5研修室)
- 案件 (1) 令和4年度外国語部会役員(案)について
(2) 令和3年度事業報告及び令和4年度事業計画(案)について
(3) 令和3年度決算報告及び令和4年度予算(案)について
(4) 令和4年度青森県研究大会(案)について
(5) 令和4年度青森県高等学校英語暗唱・弁論大会(案)について
(6) 令和4年度青森県即興型英語ディベート交流会(案)について
(7) 令和5年度東北六県英語教育研究大会組織について(進捗状況)
(8) ローテーションの確認
(9) その他
- 7月 1日(金) 第2回役員会 (於 青森県総合社会教育センター第5研修室)
- 案件 (1) 令和4年度青森県研究大会(進捗状況)
(2) 令和4年度青森県高等学校英語暗唱・弁論大会(進捗状況)
(3) 令和5年度東北六県英語教育研究大会組織について(進捗状況)
- 7月23日(土) 青森県即興型英語ディベート交流会 (オンライン開催)
- 8月17日(水) 青森県高教研外国語部会研究大会 (於 青森県総合社会教育センター)
- 9月 8日(木) 青森県高等学校英語暗唱・弁論大会 (於 青森県総合社会教育センター)
- 暗唱の部(1校1名まで) 3名参加
創作の部(1校2名まで) 26名参加 ※上位2名が東北大会へ出場
※創作の部に参加する学校は暗唱の部に参加できないこととする。
- 11月 1日(火) 第72回東北六県英語教育研究大会 (於 アイーナ 岩手県民情報交流センター)
大会テーマ:「資質・能力の三つの柱を総合的に育む英語授業の在り方」
- 11月 2日(水) 第70回東北六県中学校英語暗唱・高等学校英語弁論大会
(於 マリオス小ホール 盛岡市民文化ホール)
- 中学校の部6名、高校の部12名参加
暗唱の部・中学校(1名)と創作の部・高校(2名)参加
- 11月14日(月)
～18日(金) 第72回全英連佐賀大会(オンデマンド配信による開催)
大会テーマ「Across the Borders」
～校種をつなぎ、未来を切り開くコミュニケーション能力を育む英語教育～
- 11月19日(土) 分科会 オンライン開催により、第1部、第2部併せて28分科会程度を予定

令和5年

- 2月 2日(木) 第3回役員会 (於 青森県総合社会教育センター予定)
- 案件 (1) 令和4年度事業報告及び令和5年度事業計画(案)について
(2) 令和4年度決算報告(中間)及び令和5年度予算(案)について
(3) 今後の研究ローテーションについて
(4) 令和5年度東北六県英語教育研究大会(案)について
(5) その他
- 2月 5日(日) 第15回全国高等学校英語スピーチコンテスト(オンライン開催)

研 究 テ ー マ

紀要 (集)	年度	研 究 テ ー マ	会 場	会員数	大 会 参加数	大 会 発表者数
30	60	○これからの英語教育を考える ー生きた英語力を育てるにはどうしたらよいかー	八工大第二高校	431	471 中高含	7
31	61	○英語教育に求められているもの ーFocus on the learnerー	五所川原高校	418	256	3
32	62	○自ら学ぶ力を育てる英語教育を目指して	弘前南高校	421	296	3
33	63	○国際化時代における英語教育のあり方を求めて	三沢高校	420	289	5
34	(平) 元	○国際化時代に対応する英語教育を求めて	青森高校	424	315	5
35	2	○コミュニケーション能力を育てる英語教育	八戸西高校	428	262	6
36	3	○コミュニケーション能力を育てる英語教育	板柳高校	408	272	7
37	4	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	弘 前 中 央 高 校	408	400 中高含	11
38	5	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	三本木高校	395	249	12
39	6	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	青森南高校	408	279	11
40	7	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	八戸高校	426	274	9
41	8	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	鯉ヶ沢高校	430	231	7
42	9	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	弘前高校	435	260	12
43	10	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	青森文化会館	423	1464	18
44	11	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	田名部高校	417	179	7
45	12	○実践的コミュニケーション能力を養う 青森県の英語教育のあり方	八戸南高校	417	215	8
46	13	○国際化の中における青森県の英語教育のあり方	鶴田高校	410	166	8
47	14	○新学習指導要領に対応する英語教育のあり方	黒石高校	406	200	3
48	15	○新学習指導要領に対応した 青森県英語教育の課題解決をめざして	青森東高校	405	182	3
49	16	○コミュニケーション能力の育成ための課題解決を模索して ーHow Can We Solve In Improving Communicative Competence?ー	八戸高校	367	269	3
50	17	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	三沢商業高校	367	126	3
51	18	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	木造高校	348	130	3
52	19	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	弘前文化センター	328	122	3
53	20	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	県総合社会教育センター	326	137	3
54	21	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	県総合社会教育センター	331	119	4
55	22	○「発信力」を育成するための4技能を統合した英語教育を 目指して (第60回東北六県英語教育研究大会)	弘前文化センター	340	344 中高含	7
56	23	○コミュニケーション能力を育成する指導と評価	八戸工業大学	341	120	4
57	24	○コミュニケーション能力を育成する指導と評価	県総合社会教育センター	324	125	4
58	25	○コミュニケーション能力を育成する指導と評価	アピオあおもり	338	135	4
59	26	○今、高校英語教育に求められているものは何か？	三沢市国際交流教育センター	337	120	5
60	27	○今、高校英語教育に求められているものは何か？	きざん八戸	323	136	9
61	28	○グローバル社会に貢献できる人財を育成する英語教育	リンクステーション青森	333	333 中高含	11
62	29	○グローバル社会に貢献できる人財を育成する英語教育 ～今、高校英語教育に求められているものは何か～	松の館(つがる市)	317	124	5
63	30	○グローバル社会に貢献できる人財を育成する英語教育 ～今、高校英語教育に求められているものは何か～	弘前文化センター	303	142	6
64	(令) 元	○生涯にわたって国際社会で生きていくための英語教育 ～協働的な学びを通して～	三沢市公会堂	309	127	14
65	3	○生涯にわたって国際社会で生きていくための英語教育 ～協働的な学びを通して～	オンライン	292	70	5
66	4	○生涯にわたって国際社会で生きていくための英語教育 ～協働的な学びを通して～	県総合社会教育センター	285	109	8